平成20年　3月31日発行

名古屋女子大学

6号

総合科学研究所だより

Research Institute of Human Ecology,Literature and Education

研究所の事業について

総合科学研究所主任　渋谷　寿　SHIBUYA Hisashi

平成19年度は、所員の皆様のご協力のおかげをもちまして、研究所の事業が様々な面で充実した年になりました。ここに、それらの活動を振り返るとともに今後の展開についてお伝えいたします。

記念すべき出来事の一つは、高等学校の研究会が発足し、公開授業と研究会が催され、高等学校教員と大学教員が連携する研究体制がスタートしたことです。これにより本学は、付属幼稚園および、中学校・高等学校・大学と、一貫した教育研究体制の基礎が確立されたように思われます。それぞれの研究における視点は異なっておりますが、本学ならではの、それぞれが有機的に関連した中・高・大一貫教育のあり方の研究にまで展開されることが期待されます。現在、大学では、初年次教育についての機関研究が進んでおり、教科書作成の試みの段階に至っています。この研究を推進する上でも高等学校での研究がスタートし、高等学校と大学の教員が連携する事は大きな進歩だと思われます。

もう一つ、新たな地域貢献事業の協賛企画として、汐路学舎において、イルミネーションを中心とした「春待ち・小町」～咲き誇れこころ花、届け「わたし」ごころ～という催しが行われました。2月という寒い時期に、サクラを待ちわびる思いをLEDの灯りに託した楽しい催しでした。イルミネーションコンテストの他楽器演奏、展示会、模擬店等のイベントがあり、地域からも多くの参加者があり盛況でした。

機関研究では、継続している、「大学における効果的な授業法の研究」の他に、「創立者越原春子および女子教育に関する研究」が、まとめの段階を迎えました。これらの成果は、『総合科学研究第2号』でご紹介しています。

また、継続研究として中学校では第136回目の公開授業・研究会を迎えました。研究成果を上げるための、積み重ねる研究の重要性を物語っています。平成19年度は道徳の公開授業と研究会での議論をとおして、人間教育における本質的な検討が行われました。付属幼稚園では、公開の研究保育が開催され、大学教員も参加して意見交換が行われ実りある研究会となりました。

以上のように、総合科学研究所の活動内容は、以前よりパワフルになり、より深い研究段階や成果を生み出す段階に至っています。平成20年度も時代を先取りした事業を継続して参ります。所員の皆様のこれまで以上のご指導、ご協力をお願いいたします。

「開かれた地域貢献事業」 短期大学部生活学科生活情報専攻『春待ち・小町』プロジェクト

◎川田博美・鷲野友美

サブタイトルを『咲き誇れ「こころ花（ばな）」、届け「私ごころ」』とするイベント『春待ち・小町（はるまち・こまち）』は、2008年2月6日から11日までの6日間、汐路学舎の中庭とその周囲の校舎1階を利用して開催しました。シンボルとなる東館前の『小町ざくら』には、約4000個の桜の花型電球を取り付け、冬に満開となる桜をイルミネーションで実現しました。あいにく初日は大雪となったものの、特に9日から11日の3日間には、東館1階を『春待ち通り商店街』に見立てた会場を設け、イベントや模擬店、ゲームコーナーや桜湯のサービス、学科展（生活学科と保育学科）などを催しました。そのほか、春光会による『煌きの春ひかり』と『願かけサクラ』をはじめ、地域の生活情報を集めた『桜の森』、地域の皆さんの作品を集めた『桜の園』、生活学科のみなさんのゼミ作品展や『イルミネーション・コンテスト』など、盛りだくさんの企画で、地域のみなさんとともに盛り上げることができました。地域の皆さんには、この『学生の手による』小さな町で、ほんの少しでも暖かい気持ちになっていただければと考え、約100名の学生が半年をかけて準備を進めてきました。季節はずれの桜の満開を、中日新聞と朝日新聞に取り上げていただき、学生たちの努力の成果を認めていただきました。地域のみなさんと大学との相互情報発信を目指したこの事業は、『ミニ文化祭』という形で非常に多くの地域の方々や学生のみなさん、教職員のみなさんの『まごころ』を交流させることができたと感じています。

（文責:川田 博美）

シンボルの「小町ざくら」

春光会による「煌めきの春ひかり」

地域の方の作品を集めた「桜の園」

「さくらステージ」でのコンテスト表彰

模擬店などの「春待ち通り商店街」

ゼミ作品を展示した「さくらギャラリー」

機関研究報告　「創立者越原春子および女子教育に関する研究」

◎丸山竜平・伊藤太郎・木原貴子・遠山佳治・羽澄直子・依岡道子

先に2ヵ年にわたって実施された本研究は、今後も継続されることになりました。

本年（平成19年）度の研究方針は、上半期では研究員がそれぞれ独自に活動を実施しました。そして、下半期においては研究発表会の形式により各自の研究成果を発表し、機関研究としての本質を求めています。具体的には研究員の個々の研究を共通の理念として貫くことのできる一筋の屋台骨を模索しながら、標題に迫っていくことになります。

現在、各研究員の研究課題は以下のようであります（順不同、発表順）。

（1）越原春子の思想の形成と尾崎咢堂（名古屋咢堂会）との関わりを論及するものです。「名古屋女学校・名古屋高等女学校時期における建学の精神および教育理念の一考察」（遠山佳治）

（2）イギリスの近代化をとおして女子教育を問い直そうとするものです。「なぜいま女性原理なのか―英国の『近代化』プロセスを辿って―」（伊藤太郎）

（3）女性の教育者と作家に焦点を当て、従来の実務的な職能人を目指す女子教育とは異なる新しい女子教育を論じます。「女子教育がもたらす新たな職業の可能性」（羽澄直子）

（4）家庭と教育、職業教育などの視点で、少女や女性むけの雑誌を分析します。「19世紀のイギリスにおける女子教育―少女雑誌及び、女性雑誌を中心に―」（木原貴子・依岡道子）

（5）越原の地理的歴史的な環境が創立者の思想にどのような影響を与えたのかを考えていきます。「創立者生誕期の時代性―幕末維新期の越原―」（丸山竜平）　（文責:丸山 竜平）

機関研究報告　「大学における効果的な授業法の研究４」
～初年次教育についての授業法の開発～

◎遠山佳治・伊藤太郎・宇野民幸・白井靖敏・竹尾利夫・谷口富士夫・原田妙子・幸順子

大学における初年次教育とは、高等学校までとの学びの方法やスタイル、環境の違いを新入生が意識をし、準備できることを主な目的とします。学ぶ環境の節目に現れる問題は、義務教育においては「小1プロブレム」や「中1ギャップ」と呼ばれておりますが、これらがどこにでも現れ、対策が必要とされているのと同じように、大学の初年次教育は不可避になっているといえます。教学側がする新入生の話題の内には、互いに通じてしまう諸問題があり、年毎に、また日増しに共通の実感となっているところです。そんな中、この研究グループで勉強や報告をしながら、大きく2つのことを意識するようになりました。その1つは、「小1プロブレム」や「中1ギャップ」にもある接続の問題は、年次が進むにつれ普通は解消されていきますが、本当に児童や生徒に身をもった形で解消されているのか、ということ。もう1つは、この解消されていく過程には、児童間・生徒間の交流が重要となる、ということです。大学の初年次学生の話題と関連づけると、前者は、当然あたり前であろう礼儀や態度（小学校でも注意されたであろうこと）がとれないことがある理由として、その必要性を社会的に、あるいは相互理解として自覚・納得できていないことを感じること、後者については、学生間や先輩からの教えやアドバイスにはさほど抵抗もなく、むしろそれを求めている傾向も見受けられること、が挙げられます。これらもポイントとして、制作する初年次テキストへ具現化するには、「あたり前のような事柄・理由も分かりやすく示し、それが学生間の交流・議論につながるものであるとよいこと」、「先輩の実践例や生の声があり、リアルなスタイルが実感できること」が考えられます。さらに「学生サポーター」など、今後も追加・差し替えできるバインダーテキスト方式を予定しております。それをもとに、我々も話題から議論に展開していかなくてはと感じています。　（文責:宇野 民幸）

機関研究報告　「幼児の才能開発に関する研究」
～豊かな感性や表現力を育むための実践～

◎幼児保育研究グループ

第14回 研究会（11月21日）

今年度の研究テーマ「幼児の感性と表現」から、5歳児は「リサイクル品を使ったおもちゃ作り→ゲームやさんごっこへ」という造形的な取り組みを、また、3・4歳児は「リズムあそびを中心としたお話あそび、運動あそび」という身体表現についての取り組みを、『研究保育』という形で実施しました。

研究会では、『研究保育』の記録ビデオを見た後、実体験の重要性とともに、子どもたちの主体的な活動への取り組みを考え、その中で友だちとの協力や、ともに達成する喜びを経験できることの意味について、意見交換をすることができました。5歳児の造形活動では、「作る」中での子ども同士のアイデアをサポートする教師の援助のあり方について、3・4歳児のリズムあそびでは、音楽や様々な指示から身体表現につながる展開の継続性についても、今後に結びつく課題提供をいただき、さらなる保育の工夫を考えていきたいと思っています。　（文責:森岡 とき子）

第14回　研究会

研究保育年長組「リサイクル品を使ったおもちゃ作り」

機関研究報告　「中学生の学力向上に関する研究」

◎中学校学力向上研究グループ

第135回研究会（11月2日）

●研究テーマ「思考を深める授業づくり」
●公開授業　「道徳:生き物への愛情をとおして」
中等部1年　中野 容子 教諭

道徳の授業においては、生徒自身が主体的に自分自身に問い掛け、自己の内面を見つめることができるような深い思考を繰り返すことによって、少しずつ人間的な成長を図っていくことが必要だと考えています。

今回の研究授業では、「生命の尊厳」という学習内容を取り扱う中で、生徒一人ひとりが生命についてじっくりと考えることができるようになるためにはどのような授業づくりをしていくのが望ましいのかというところに焦点をあて、それを（1）資料の選定、（2）授業展開、（3）発問の3つの点から見直しました。
公開授業前や後の研究会で様々な専門分野の先生方からアドバイスやお話を伺うことで、今後の授業づくりにも大変参考になりました。

（文責:中野 容子）

第136回研究会（11月30日）

●研究テーマ「生徒が自然に授業へと集中していける導入のくふう」
●公開授業　「道徳:理想の実現『将来の自分について考えよう』」
中等部3年　平川 理基 教諭

中学3年生2学期道徳授業は「自分自身の生き方について考える」ということを学期のテーマとして、高校卒業後の進学や就職、また命について考えてきました。生徒一人ひとりが、この学期テーマについて真剣に向き合ってほしいという思いがあり、生徒が授業に集中していく工夫について考えてきました。

そのため、今回の研究授業では時間にしては短いが、授業づくりには欠かせない導入について研究を進めることとしました。授業づくりの段階から発問の内容だけでなく、発問の仕方、語りかけ方など、技術的なことについても具体的な方法を先生方からアドバイスをいただけました。また、大学の先生方からは、授業全体の内容や、発問内容など、今迄より『よい授業づくり』のために解決すべき課題などについてのアドバイスをいただけました。

（文責:平川 理基）

第25回研究発表会（2月19日）

●研究テーマ　「今年度の研究について」中等部　福田　誠 教諭
「系統性を見据えた道徳の「よい授業」を考える～生徒の『性』に関する意識に着目して～」中等部サルバシヨン 有紀 教諭

今年度の研究活動は3度の公開授業と研究発表会に伴う研究授業、そして夏期研究合宿を中心として進めてきました。成果として、①授業としての道徳におけるよい授業のあり方を模索し、具体的な姿の例を提示することができたということ。②夏期研究合宿での3日間にわたる集中協議を通じて、本校の道徳における全体計画作成に向けて、基本的な考え方や方向性、作成手順等についてさまざまな角度から検討を加えながら、共通理解を得るところまで到達することができたこと。以上の2点が挙げられます。また、毎回の公開授業に際しては度重なるマイクロ・ティーチングの繰り返しが、授業研究を進める上で大きな役割を果たしてきたと考えています。

（文責:福田 誠）

機関研究報告　「高校生の学力向上に関する研究」

◎高等学校学力向上研究グループ

第1回研究会（11月29日）

●研究テーマ「受験力を養う『演習授業』のあり方について」
●公開授業　「数学:数学 IA演習」高等学校2年　安藤 友一 教諭

今年度から高等学校においても、総合研究所と連携した形での研究活動を開始することとなりました。研究テーマは、進学指導に重点を置いた「学力」の向上です。現在、高等学校ではⅠ類・Ⅱ類・Ⅲ類の3つのコースに分けられ、それぞれ特色のある教育を展開していますが、その中のⅠ類（特別進学コース）の授業に注目し、研究を重ねました。Ⅰ類では、国公立大学・難関私立大学合格を目標に、日々様々な授業が展開されています。しかし、授業内容について研究・協議されることは非常に少ないです。また、3年生になると「演習授業」が多くなりますが、これについても同じことです。特に入試で結果を残すためには「演習授業」はとても重要です。

数学のセンター試験で高得点を上げるには、「計算力」と「判断力」がどうしても必要となります。そこで今回の研究として、「計算力」を育成するために簡単な計算の反復練習、「判断力」を育成するために入試問題のパターンを覚えるという2つのことを、「演習授業」の中に取り入れることを試みました。今回の研究授業における生徒の活動を見ていると、到達点が明確になっている分、いつも以上に積極的に授業に取り組む姿が印象的でした。

授業後、高・大の先生方で今回の研究授業を振り返り、実りのある質疑応答を交わしました。今後、この研究で考えてきたことをさらに深め、さらなる学力向上に向け進めていきたいと思います。

（文責:江本 幸司・安藤 友一）

プロジェクト研究報告　ICTを利用した国際交流プログラムの企画・実践とＬＭＳを通した基礎的支援
～質の高い家庭科教員養成のためのプログラム開発の試み（その２）～

◎白井靖敏・山口厚子

18年度に行ったプロジェクト研究（その1）の研究から得られた成果をもとに、本研究では、ICT(Information and Communication Technology)を活用したメーリングリスト、テレビ会議、Webページの作成による国際交流の効果の検証、および、授業で取り扱う内容や手法の開発、さらには、交流の場となる目的別の教育実践的なプラットホームLMS(Learning Management System)、特にコミュニケーションシステムの基礎研究を進めている。具体的には、(1) 国際交流授業におけるコミュニケーションシステムを基礎にしたMoodle（社会的構成主義の教育理論に基づき、オーストラリアのカーテイン工科大学のMartin Dougiamas氏によって開発されたシステム）の設定、(2)先行研究（その1）で得られたメーリングの内容分析結果に基づいた新しいコミュニケーションメニュー（Moodle Contents）の作成、(3)国際交流プログラムの実践研究の継続を目指し、相手国（シンガポール）の教員と直接交流、を行っている（写真）。こうした研究の積み重ねが、本学の家庭科教員養成カリキュラム発展に寄与するものと確信している。　（文責:白井 靖敏）

南洋女子中学校

平成19年度 講演会

第1回高等学校教育講演会（12月15日）

「成績向上校の実例研究」

講師：長井 清氏（学校法人河合塾中部地区営業部）

今年度テーマに掲げた「高校生の学力向上に関する研究」で取り組むことにした、進学指導に重点を置いた「学力」の向上について、学校法人河合塾中部地区営業部名古屋の長井清先生を招いて「成績向上校の実例研究」という演題でお話いただきました。入学時からの大学入試を意識させること、予習中心の授業展開、小テストの有効活用、自習室の効率的開放など教員一人ひとりのみならず、学校としての取り組みも不可欠である実例が多数報告されました。これら多くの学校の実例を聞き、本校の進学実績の向上につながるいくつかの指摘を見出すことができました。

（文責:江本 幸司）

教育講演会（2月19日）

「これからの道徳教育のあり方」

講師:七條 正典氏（香川大学教育学部教育実践総合センター　前文部科学省初等中等教育局教育課程課　教科調査官）

香川大学の七條正典先生をお招きし、「これからの道徳教育のあり方」として、さまざまなご提言をいただきました。冒頭、学習指導要領の改訂に触れられ、次の改訂でも「生きる力の理念は変わらない」ことを強調されました。その上で、今後、道徳教育をより充実させるために、①重点の明確化と効果的な指導、②魅力的な教材を扱う工夫、③体験活動の重視、④家庭・地域社会と一体となって取り組むことの必要性を挙げていただきました。これらについては、今年度の研究内容に合致する部分と、今後研究を深めることが必要な部分が混在していると感じました。また、「いくら理念を唱えても、それが子どものレベルで具体化されないと大きな意味を持たない。」ということを、さまざまな実践を紹介しながら詳しくご指摘いただき、「その鍵は自らのこととつなげて考えられるような学習になっているかという点である。」と結論づけられ、結びにあたっては、「これからも子どもたちの輝く笑顔が教室のあちらこちらで見られるような学習が展開されることを期待している。」と、私たち教師への温かくも厳しいご期待を示されました。この1年間、道徳に焦点を絞って研究を重ねてきましたが、今後の展開への示唆を与えていただいた貴重な講演でした。

（文責:福田 誠）

平成20年度プロジェクト研究

総合科学研究所では、自然科学・人文科学等の専門分野の枠にとらわれず、理論研究または実践活動の振興を目的として、学際的かつ複数の研究者による共同研究を助成しています。平成20年度の募集を平成19年10月16日～11月30日の期間行いました。選考の結果、次の研究が次年度スタートします。

家政学とICTを活用した国際交流学習を実践するためのサポート体制の確立

～質の高い家庭科教員養成のためのプログラム開発の試み（その３）～

◎山口厚子・木原貴子・白井靖敏

質の高い家庭科教員を養成するために必要とされるプログラムとはどのようなものかを考究し、実践することを目標に始まったこの研究の試みは、平成20年度で3年目を迎えます。今まで、国際交流を取り入れたプログラムづくりに焦点をあて、「国際交流プログラム企画・ホームページ作成」（平成18年度）、「ICTを利用した国際交流プログラムの企画・実践とLMSを通した基礎的支援」（平成19年度）について研究してきました。その中で私たちは、すでに存在する国際的な家政学のネットワークとICTを効果的に利用することで、参加者すべてが相互に学べる魅力的な国際交流プログラム実践ができると確信しました。

そこで、平成20年度は、過去2年間の研究成果をふまえた国際交流学習を中学校・高等学校・大学レベルの双方で実践するとともに、その実践をサポートする体制を確立することに焦点をあてて研究を進めたいと思います。具体的には、国際交流学習を促すICT環境やテクニカルサポートの充実、プラットホーム作成、語学力強化等を含めたプログラム開発推進のための指導・支援者の協力体制、人的ネットワークのあり方を探り、できる限り有効な支援体制を確立することを目指します。実践拠点は本学、国際交流学習への参加者は主として名古屋女子大付属中・高等学校と名古屋女子大学の学生とします。今後、質の高い家庭科教員養成のプログラム開発をさらに進め、将来的には、家政学部を有する本学の特色化につなげたいと考えています。

（文責:山口 厚子）

編集後記

ここに総合科学研究所だより第6号をお届けします。研究所にとりまして、中学校・高等学校・大学一貫教育を視野に入れた、新たな高等学校での研究会がスタートしたことは記念すべき出来事です。また、継続している機関研究における成果や、地域貢献事業におけるLEDの灯りをテーマとした斬新なイベント等の内容をご報告しました。このように、所員の皆様のご理解とご協力のおかげをもちまして、時代の要求に応える事業・企画を遂行できました。ご執筆いただきました先生方には深く感謝申し上げますとともに、今後も皆様のご協力をお願いいたします。

名古屋女子大学　総合科学研究所だより
平成20年3月31日　6号
発行・編集/名古屋女子大学　総合科学研究所　〒467-8610 名古屋市瑞穂区汐路町3-40　TEL052-852-1111（代）
本誌記事、写真の無断転載を禁じます